

都市生活者の近郊に生きる野生と自然に親しむ活動

野生と自然に親しむ会

代 表 大 竹 勝

はじめに

かつては自然が身近にあり、その恩恵を私たちは意識しないで受けてきました。現在身近な自然は少なくなり、都市生活者のなかに自然との接点を持たない人々が多くなっています。特に子どもにおいてその傾向が強いようです。私たちは、この子どもを中心にその親を含めて対象にして、自然との接点を求めて野生と自然に親しむ活動を、博物館学芸員、小・中学校教師、自然観察指導員などを中心に、観察会、野外自然教育教材の開発などを行ってきました。

1. 活動の内容

活動は犬山市と愛知県周辺地域で身近な自然を中心に、小学校3年以上一般までを対象にして、30名の定員で観察会を行い、自然との接点を探求しました。参加者にはその都度旅行傷害保険をかけ、傷害賠償責任保険に加入の自然観察指導員の引率で行い、事前の調査、テキスト教材の整備を十分にして、より効果のある野外教育を、より安全に行うことを目指しました。

1988. 8. 7 ニホンザルをさがしに行こう

サルのいる山に入って、山を歩きながら、植物や全体の環境を理解し、サルの痕跡を探しました。実際にニホンザルを見ることができなかったのですが、他の動物の生活痕跡を観察したり、森の仕組みを考えたりして、自然全体を理解することができました。

1988. 9. 18 木曽川の生物をしらべる

木曽川で水生昆虫を中心に、水の中の生き物を、自分の目で確かめ、スケッチを行い、水の中の食物連鎖、水の汚れと生物の関係をしらべました。いままできれいな川というだけで、この水の中に、これだけ多くの生き物が生活していることは、参加者にとっては驚異でした。またなにげなく流している生活排水が、この生き物たちに大きな影響をもつことも理解できました。

1988. 12. 25 木曾川の水鳥を探してみよう

冬鳥のカモ類を中心にまわりの鳥たちの観察を行い、この日には25種が観察できました。北国から寒さを避けて海を渡って、日本にやってきた鳥たち、おなじ日本でも山の上から里におりてきた鳥たち、いつも同じところに住む鳥たちが、同じ場所で生活していることを観察しました。また水ぎわの砂の上の他の動物の足跡も観察し、自然は地球全体で、考えることを学習しました。

1989. 2. 19 冬ごしの生き物たちをしらべる

春から秋にかけて多くいた虫たちがどこに行ったのか、土の中、朽ち木の中、落葉の下、石の下、木の皮の下などをしらべ、卵、幼虫、さなぎ、成虫などで春の訪れを待つ虫たちを探してみました。生き物たちは人間のように暖房のない野外で、なかには食べられるものと食べるものが、同じ場所で冬越しをしているなど、日本の季節に適応して、それぞれに寒さをしのぐ方法を開発していること、などを学びました。

1989. 3. 30 山でニホンザルの生活を調べる

岐阜県美濃の山中で、ニホンザルの生活する自然の山と人工林の違いや、ニホンザルの生活痕跡（採食あと、糞）糞による食べ物しらべ、ニホンザル直接観察などを行いました。拾ったニホンザルの糞を、谷川の水で茶こしを使い洗ってどんな物を食べているかを調べてみたら、木の芽や、木の皮、植物の種子などがほとんどで、人間のつくった作物はなにも含まれていませんでした。自然の豊かな林では、ニホンザルのような大型の動物もそこで生活できることを知りました。また、落葉樹林の林床の早春の花と、太陽の関係も理解できました。

1989. 4. 30 野山で春をさがそう

犬山市近郊の里山にでかけ、たんぽの花や、昆虫、雑木林の樹木などから、自分たちで自然の中の春を探しました。人と自然が共存する里山で、作物と他の草とのすみわけ、自然の中での遊びなどをしながら、それぞれに春を探してみました。人によってはそれが花であり、芽をだした植物であり、花に集まるチョウであり、南からやってきたツバメであったりして、いろいろな生き物が季節に対応して生活する状態を理解しました。

1989. 5. 8 夏にくる鳥を探してみよう

バードウィークに、公園、雑木林、照葉樹林を歩き野鳥の観察をしました。南の国からやってきた渡り鳥の夏鳥を探しながら、暑くなると山のほうに移動する漂鳥、1年中同じ

地域にすんでいる留鳥などの、姿、さえずり、を観察、この鳥たちのすめる森や環境について話あいをしました。

1989. 7. 16 干潟の生物を探る

知多半島の野間海岸で、磯や干潟にすむカニ、カイ、イソギンチャク、海藻などの生物の生態観察をしました。潮間帯にすむ生き物の生活を、潮がひいて生き物たちはどのようにしているのか、潮が満ちてきて活動を始めるようすなどを観察し、海岸に打ち上げられたビニールなどのゴミと海藻などを比較し、海藻などはそれを分解する生き物がいるが、人がすてたビニールなどはいつまでも分解されないことなどを理解しました。

2. 野外教材の開発

野外で教育活動を行うための教材は自然そのものであることは言うまでもないことであるが、その理解を助けるためには、多くの教材や教具が必要になります。従来から使用してきたものにテキスト、ホワイトボード、紙芝居などがあります。テキストを野外で使用する場合自然を観察することから、はなれる事が多くなるため、その構成が問題になります。紙芝居は解説に大きな力はあるが、持ち運びが困難であるなどいずれも一長一短があり、新しい教材の開発が必要でした。私たちはいろいろ検討したうえ、以下に述べる「折本紙芝居」を試行錯誤を繰り返しながら完成し、観察会で使用し好評を得ました。

野外で使用するためには、①持ち運びに便利であること、②耐久性があること、③水に強いことなどの条件が必要です。①の条件ではB4判3つ切りの大きさにすること。②の条件ではケント紙の使用と外側折り目に製本テープ、表示面はメンディングテープを使用しました（セロテープは耐久性に欠けることとその上に書き込みが出来ない）。一定の厚さを持たせるためにケント紙は2枚合わせとし両面テープで接着しました。③の条件では水彩えのぐと同じように使用できるアクリルカラーやポスカ、マーカー、油性サインペンなど耐久性のものを使用することで解決しました。

この折本紙芝居は、連続画面が展開できる。屏風状に立てることができる。裏面も同様に利用可能である、裏面に必要メモを記入することにより他の指導者も使用できる。必要部分だけ折り方によって表示できる。全体に厚みがあり1人でも楽に表示できる。大きさが常に一定で、持ち運びが簡単（大きなポケットならそのまま入る）などの利点が多くあります。

この方法による折本紙芝居は、一部のものを除いて、常に食物連鎖から生態系が説明できる内容とし今回以下のような9種類を作成して、野外教育の指導に使用して成果をあげることができました。

(1) コナラの林

コナラの林の四季による変化、そこで生活する動植物との関係、食物連鎖等を解説。

(2) クズ

クズをめぐる食物連鎖マメ科植物の花粉戦略の解説。

(3) ドングリ

愛知県周辺で見られるシイ、カシ、ナラ、のドングリによる検索図。

(4) 帰化植物

帰化植物の特性と、自然の変化、在来種と帰化種の見分け方。

(5) 種子

植物の種子の散布のしかた。他の生きものとの係わり方。

(6) 水生昆虫

水の汚れと水生生物、水中の食物連鎖、水生生物のグループ分け検索図。

(7) 森の木の葉

犬山市周辺で見られる照葉樹の森の木の葉による区別の検索図。

(8) 土壌生物

落葉の行方、分解者の役割、土壌生物の種類、環境との関連、林の地上と地下の解説。

(9) シデムシ

動物の死体をめぐる食物連鎖、シデムシの検索図、都市化とシデムシの関係の解説。

おわりに

私たちはこの活動を通して、野外教育の困難さを感じましたが、同時に多くの子どもたちが自然との接点をもたないまま成長することに危機感を持ちました。かつては子どもたちはどこかで自然との接点を持っていて、その原体験が自然を守りながら利用する共存を支えてきました。自然との接点を持たないのは、子どもたちに留まらず、高度経済成長期に、都市で育ったその親たちに及んでいます。観察会に参加した、子どもより親のほうがそれに感激し目を輝かせている状況は異常でした。次の世代をになう子どもたちを、塾や学校、

ファミコンからほんの一時解放して、楽しい自然との対話を実現させるためには、まだ多くの問題の解決が必要です。

まず第1は指導者の不足です。かつては親が子に、或いは年長者が年少者へと伝えられたものが、親が原体験を持たない、子どもの遊びが異年齢集団から同年齢集団となり、遊びの場所も屋外から屋内へと変化してきました。この問題解決には、それを指導するガキ大将が必要であり、その育成が急務です。次に必要なことは自然教育の普及のために、楽しみながら学習する野外用のテキスト、教材などの開発整備が必要です。最も必要なのは、図鑑やテレビなどの知識としての情報ではなく、生の情報を自然と接し、野生との感激の出会いの中から見つけることが必要で、私たちはその演出をしなければなりません。

このような活動を通して、私たちは自然の仕組みを多くの人たちに伝え、自然の大切さを理解し後世に伝える必要があります。今後も多くの自然を愛する人たちと共に、自然保護教育の指導者を育成すると共に、教材開発を行い、多くの観察会などで野生と自然に親しむ活動を続けて行きたいと思います。



冬ごしの生き物たちをしらべる



野山で春をさがそう



干潟の生物をさぐる